GPAとは

GPAとは、授業科目ごとの成績に対して、4.0～0.0のグレード・ポイントを付与し、この1単位あたりの平均を算出したもので、学生の学習到達度をはかる指標として、国内外の大学で広く使われています。

GPAの算出方法

$$GPA = \frac{(S\text{の修得単位数}\times 4.0)+(A\text{の修得単位数}\times 3.0)+(B\text{の修得単位数}\times 2.0)+(C\text{の修得単位数}\times 1.0)+(D\text{の修得単位数}\times 0.0)+(E\text{の修得単位数}\times 0.0)+(*\text{の修得単位数}\times 0.0)}{\text{総履修登録単位数}}$$

※対象とする科目は、卒業要件の科目とし、
卒業要件以外の資格科目・自由科目は対象となりません。
※対象とする評価は、「S,A,B,C,D,E,＊」とし、認定の評価「T」は対象となりません。
※再履修で評価を受けた成績については、最新の成績が反映されます。
※GPAは計算結果の小数点第3位を四捨五入し、小数点第2位までを表示します。

その1 提示方法

学生に配付される「成績表」に、当該学期（通年制学部は当該年度）と、累積のGPA値が記載されます。現時点では、就職活動等で企業に提出する「成績証明書」には記載されません。

教員がゼミ学生等のGPA値を知りたい場合には、各学部の教務担当課に相談してください。

〈GPAの算出事例〉　【例】東洋花子さんの成績表

科目名称	評価	GP	単位数	GP×単位数
社会人基礎力入門講義	S	4	2	8
英語 I	＊	0	1	0
英語 II	E	0	1	0
哲学A	A	3	2	6
ゼミナール IA	S	4	2	8
環境の科学 A	C	1	2	2
多文化共生論 A	A	3	2	6
経済学 A	B	2	2	4
国際関係論 A	S	4	2	8
キャリアディベロップメント論	D	0	2	0
合　計		21	18	42

（各科目のGP×単位数）の総和（42）÷総単位数（18）＝GPA（2.3）

その2 どのように使われる?

現時点では、学内奨学金（東洋大学奨学金（第1種・第2種）、東洋大学私費外国人留学生授業料減免）の採用基準として使用されます。また、将来的には、各学部の総代や、成績優秀者の表彰決定基準としても使用されることが考えられます。

その3 導入の背景は?

これまで本学では、成績表に個々の科目の評価と修得単位の合計数が記載されるのみで、学生に、評定平均などの成績指標を示してきませんでした。大学にも、学生の中にも、さらには社会においても、「大学では、オールCでも、単位が取れて卒業できればいい」という風潮が流れていたからです。

しかし、近年、大学教育に対する社会の期待が大きく変化し、学生が大学教育によって「何を身に付け、何ができるようになったか」が問われるようになりました。また、文部科学省中央教育審議会の答申においても、2008年12月の「学士課程教育の構築に向けて」では、単位制度の実質化や成績評価の厳格化への取組のひとつとしてGPAが取り上げられるとともに、2012年8月の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」でも、大学生に質を伴った学習時間を確保させる必要性が強くうたわれています。

このことを踏まえ、学生が一生懸命勉強してくれる土壌を作るために、まずは自らの学習到達度を「数値」として学生に明示することで、学生の意識を、「単位の量」から「単位の質」へと転換させ、学習意欲を向上させるきっかけを作っていくことが必要だと考えられます。

また、学生の意識への効果のみではなく、これまで、各学部や部署が個別に設定していた学生の学習到達度の指標を統一し、国際基準に合わせることで、学生の学習指導体制の充実や、本学の「教育の質」の向上を検討していくための下地となることが期待されます。

その4 どんな影響があるのか?

GPAでは、不合格科目・評価対象外の科目についても分母に含めて算出されます。そのため、学生が自分のGPA値を意識するようになれば、学生が、実際には修得する意志がない科目を、保険的に履修登録することが少なくなることが予想されます。このことは、大学にとって、適正な教室配置や授業運営をしやすくなるというメリットがあります。

また、GPAの導入に伴い、学生に不利益が生じることのないよう、履修登録や成績調査の取扱いに、若干の変更が生じます。

①履修登録の取消し制度の導入

…評価対象外の科目も算出対象となるため、学生が、何らかの理由で、学期（年度）途中で科目を履修する意志がなくなった際に、当該科目の履修を取り消すことができるようにします。授業開始約1カ月後に、1週間程度の期間を設けて、履修登録の取り消しを受け付ける予定です。なお、取り消しに伴う他の科目の追加履修は認めません。

②成績調査の対象の変更

…これまで学生の申し出による成績調査は、「＊」（評価対象外）とされた科目のみを対象として受付けていました。しかし、GPA導入の趣旨に鑑み、たとえA～Cの評価であろうとも、自分の学習達成度とシラバスに明示された成績評価基準とを比較して、現評価に対する疑問がある場合には、成績調査の対象とできるようにします。

その5 教員の成績評価は何かが変わる?

従来の、S・A・B・C・D・E・＊の成績評価の付け方には、変更はありません。

GPAの導入に伴い、成績評価を「相対評価」にするという訳ではありません。各授業科目の位置付け・役割・内容によって、成績分布にも違いが発生するので、現状どおり、原則としては、「絶対評価」を採用します。

また、GPAとセットにして「厳格な成績評価」ということが言われていますが、この「厳格な」というのは、今までよりも厳しい成績を付けなければならないということではありません。重要なのは、シラバスにおいて、学生に授業科目の到達目標と成績評価基準を具体的に明示したうえで、高い達成度を示した学生には高い成績を、低い達成度を示した学生には低い成績を「厳正」につけることであり、これは本来的にはGPAの導入前後で変わることではありません(※)。

※成績評価基準の明示と、それによる成績評価の具体例

成績評価基準	学生の成績	成績評価
中間試験（20%）	70点	→14点
最終試験（40%）	80点	→32点
授業内の発表（20%）	60点	→12点
レポート（20%）	70点	→14点
合　計	72点 ▶▶「B」評価	

一方で、GPAが学生に浸透していくことによって、学生の履修が、良い成績をもらいやすい科目や、自分の得意分野の科目に偏ってしまうのではないか、という危惧する声もあります。しかし、それはGPAの導入によって始まることではなく、それ以前から発生している傾向です。

この点に関しては、各授業科目の位置付けや難易度を、カリキュラムの中で体系化して学内外に明示したり（科目のナンバリング制）、教員間や科目間の評価のバラつきを可視化することで、成績評価について、組織的に検討や調整を行っていくことが必要です。また、同じ授業科目を複数クラスで開講する際などには、予め成績評価基準を調整・共有するなどして、学生が不公平感を持たないようにすることも重要です。